九州生活福祉支援研究会研究論文集第 8 巻第 2 号（平成 26 年 12 月 31 日）松山郁夫
研究論文

保育を学ぶ学生における自閉症児に対するイメージの構造

松山　郁夫*

Structure of the Image for Children with the Autism in University Students Learning Childcare

Ikuo MATSUYAMA

【要約】本研究では、保育を学ぶ学生が、自閉症児に対してどのようなイメージを抱いているのかを明らかにする。このため、保育を学ぶ学生が抱く自閉症児に対するイメージを、SD 法による 40 項目からなる質問紙票を用いて調査した。有効回答が得られた 113 名の回答について、各質問項目の平均値と標準偏差を算出するとともに因子分析を行った。その結果、保育を学ぶ学生は、自閉症児を、「態度に関すること」、「適応に関すること」、および「内面に関すること」の観点からイメージしていること等が示唆された。

【キーワード】自閉症、自閉症児のイメージ、保育を学ぶ学生　SD 法　因子分析

Ⅰ　はじめに

カナーは 1943 年に、行動異常や情緒的混乱を示す子供のなかでも、特に生後間もなくから顕著な自閉症状を示す 11 例の児童を、情緒的接触における自閉的障害（autistic disturbance of affective contact）として報告した（Kanner, 1943）[1)]。翌年 2 例を追加し、早期幼児自閉症（early infantile autism）と命名した。以降 70 数年が経過し、自閉症の本態について内外を問わず臨床家や研究者によって様々な論争が展開された。膨大な自閉症に関する知見が報告されてきたにもかかわらず、未だに多くの問題がある。

自閉症があると、要求を言葉で表現できても目線が合わず、適切な身振り動作を伴わない、覚えた言葉を日常生活の中に応用して使うことが難しい、抽象的な概念や事物の関連性を理解したり使ったりすることが難しい、および言葉や文章が言えても意味のある会話を生成できず、一方的な話題になってしまう等のコミュニケーションスキルに困難さを持つ（Richman　2001）[2)]。このように、自閉症はコミュニケーション障害を主症状とし、対人関係形成に著しい困難を示すと認識されている。

今後、地域における自閉症児に対する保育システムを確立していく際、保育士や幼稚園教諭における自閉症に対する理解を深めることが不可欠となる。そのためには、保育士や幼稚園教諭を養成する教育課程における自閉症に関する講義・演習・実習等の充実が求められる。その際、保育を学ぶ学生が抱く自閉症児に対するイメージがどのようなものなのかを把握しておく必要がある。

*佐賀大学文化教育学部

大学生における自閉症に対するイメージには、「無理解に基づく偏見」、「積極的な関与」、「表面的な理解による誤解」の 3 つの構造があるとされている（田実 2007）[3]。また、自閉症の認識に関して浮上した 15 の概念をもとに、短期大学生の自閉症に関する構造モデルを生成し、「病気なの」「生活・家庭環境」「こわい・かわいそう」「学習力・生活力の弱さ」「発達のおくれ」「特別な手だて」という 6 つの認識段階レベルが確認されたと報告されている（石山貴章・安部孝・田中誠 2008）[4]。これらより、自閉症という障害を理解するにあたって多くの誤解や偏見があり、その根源に自閉症児に対するイメージがあると窺える。

保育を学ぶ学生の場合、自閉症の障害特性がそのイメージに影響を及ぼし、そのことが保育の仕事に就いた時に、自閉症児への対応に否定的な影響を及ぼす可能性がある。したがって、保育を学ぶ学生が、自閉症児に対してどのようなイメージを持っているのかを捉え、そのことを念頭に置いて保育者を養成する必要がある。したがって、本研究の目的は、保育を学ぶ学生が抱く自閉症児に対するイメージがどのようなものなのかを明らかにすることとする。

Ⅱ　対象と方法

１．調査方法と倫理的配慮

平成 26 年 6 月に、Ａ県Ｂ大学で保育を学ぶ大学生に対して、回答への記入を無記名とした独自の質問紙票を配布し、その場で記入してもらい、回収する方法にて質問紙調査を実施した。その際、倫理的配慮として、回答への記入は無記名で行った。さらに、調査の主旨とデータの分析に際しては、すべて数値化することを口頭と書面で説明し、質問紙票への記入に関する承諾が得られた場合、回答してもらうこととした。

2. 調査項目と分析対象

調査対象である保育を学ぶ大学生から得られた合計 121 名の回答のうち全項目に回答した質問紙票を有効とした。有効回答率は 93.4%(113 名)であった。したがって、113 名からの有効回答を分析対象とした。

調査項目については学生のプロフィールに関する、性別、年齢、自閉症児に接した経験の有無、自閉症児に対する関心の有無、保育園での実習経験の有無、幼稚園での実習経験の有無である。以下は分析対象者のプロフィールである。

性別については男性 6 名(5.3%)、女性 107 名（94.7%)、年齢については 20 歳から 22 歳までで、平均 20.3 歳（標準偏差 0.47)、自閉症児に接した経験についてはあるが 50 名（44.2%)、ないが 63 名（55.8%)、自閉症児に対する関心についてはあるが 97 名（85.8%)、ないが 16 名（14.2%)、保育園での実習経験についてはあるが 52 名（46.0%)、ないが 61 名（54.0%)、幼稚園での実習経験についてはあるが 78 名（69.0%)、ないが 35 名（31.0%）であった。

3. 調査内容と分析方法

予備調査として保育を学ぶ大学生 10 名に、子供に対するイメージを単語（形容詞や形容動詞等）で複数記入してもらった。その対義語が確認できる「優しい―厳しい」「頼もしい―頼りない」等、40 対の形容詞対または形容動詞対を選定し、独自の自閉症児に対するイメージを問う質問紙票を作成した。

その際、Osgood（1957）らによって提唱された、情緒的意味の測定を目的とした手法である SD 法

（semantic differential method）[5)6)7)]を用い、それらの形容詞対および形容動詞対について、学生が抱く自閉症児に対するイメージがどれにより当てはまるかを、「どちらでもない」を中位とする7件法で回答してもらうようにした（図１）。

質問紙法における質問項目は、自閉症児に対するイメージを問う 40 項目とした。右端を 1 点、左端を7点として、1点から7点までを割り振ることにした。形容詞対および形容動詞対ごとに平均値と標準偏差を算出した。自閉症児に接した経験の有無別で、形容詞対および形容動詞対ごとに平均値と標準偏差を算出し、各質問項目でｔ検定を行った。

次に、各質問項目についてPromax回転を伴う主因子法による因子分析を行った。また、因子分析によって得られた各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を求めた。その際、因子ごとの項目数が異なるため、算出された平均値を項目数で除したものを平均値として示した。さらに、各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を用いて、各因子間で平均値に差があるかどうかを検討するために、対応がある場合の一元配置分散分析を行った。なお、各因子のCronbachのα係数を求め、各因子別、および全体としての内的一貫性を有するかどうかの検証も行った。

	非常に　かなり　どちらかというと　どちらともいえない　どちらかというと　かなり　非常に	
1. 優しい	＋----＋----＋----＋----＋----＋----＋	厳しい
2. 明るい	＋----＋----＋----＋----＋----＋----＋	暗い
3. 静かな	＋----＋----＋----＋----＋----＋----＋	うるさい
4. 活発な	＋----＋----＋----＋----＋----＋----＋	不活発な
……	……	……
……	……	……
40. おしゃべりな	＋----＋----＋----＋----＋----＋----＋	無口な

図1. 使用した独自の40対の形容詞対等による質問紙票の様式（一部抜粋）

Ⅲ　結　果

自閉症児に対するイメージについての各質問項目の平均値と標準偏差を算出した(表 1)。平均値の最小値は3.03（「8. 落ち着いた―落ち着きのない」）で、最大値は5.50（「23. 敏感な―鈍感な」）であった。全40項目中、平均点が5点以上の項目は、得点の高いものから（「23. 敏感な―鈍感な」、「21. 素直な―強情な」、「22. 自由な―不自由な」）等の 3 項目（7.5%）であった。また、28 項目が 4 点台（70%）、9項目（22.5%）が3点台であった。

また、自閉症児に接した経験の有無別に、各質問項目の平均値と標準偏差を算出し、各質問項目でｔ検定を行った(表 2)。有意差が認められたのは、「12. 積極的な―消極的」、「15. 陽気な―陰気な」、「31. 感じのよい―感じのわるい」の 3 項目（10.0%）であった。3 項目の平均値共に、自閉症児に接した経験が有る方が高かった。それ以外の 37 項目（90.0%）には有意差が認められなかった。

これら40項目について、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.76であった。また、Bartlettの球面性検定では有意性が認められた（近似カイ2乗値 2646.02　p<.01）。このため、40項目については因子分析を行うのに適していると判断した。

これら40項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は、10.60、3.64、2.81、2.49、1.89、1.55、1.46……というものであった。スクリープロットの結果も考慮すると、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで、3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その後、3因子の因子負荷量が全て0.4以上になるまで主因子法・Promax回転による因子分析を繰り返した。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった13項目が除外された。Promax回転後の因子パターンは表3の通りであった。回転前の3因子で27項目の全分散を説明する割合は51.14%であった。なお、これら27項目について、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.82であった。また、Bartlettの球面性検定では有意性が認められた（近似カイ2乗値 1629.10　p<.01）。

各因子のCronbachのα係数を求めたところ、第1因子に関してはα＝0.89、第2因子に関してはα＝0.86、第3因子に関してはα＝0.75であり、全項目で0.90との値を示したことから、各因子別に見ても、全体としても、内的一貫性を有すると判断された。

第1因子は、「35. 良い―悪い」、「17. 気持ちのよい―気持ちのわるい」、「36. 幸福な―不幸な」、「10. かわいらしい―にくらしい」、「18. 親切な―不親切な」など、主として自閉症児の態度から抱くイメージを内容としていたため、「態度に関すること」と名づけた。

第2因子は、「14. にぎやかな―さびしい」、「15. 陽気な―陰気な」、「4. 活発な―不活発な」、「12. 積極的な―消極的な」など、主として自閉症児の社会適応に関するイメージを内容としていたため、「適応に関すること」と名づけた。

第3因子は、「30. 外向的な―内向的な」、「19. 安定した―不安定な」、「24. 社交的な―非社交的な」、「38. 理性的な―感情的な」など、主として自閉症児の内面的なことに関して抱くイメージを内容としていたため、「内面に関すること」と名づけた。

因子別の平均値（標準偏差）は、第1因子4.42（SD：0.75）、第2因子4.45（SD：0.60）、第3因子3.48（SD：0.68）であった。

各因子間の平均値について対応がある場合の一元配置分散分析を行った結果、3因子の平均値間には有意差が認められた（表4）。さらに、各因子の平均値に対して多重比較を行った結果、第1因子と第3因子間、及び第2因子と第3因子間のそれぞれに有意差が認められた。第1因子と第2因子間には有意差が認められなかった。このため、保育を学ぶ学生は、自閉症児に対するイメージについて、まず、第1因子「態度に関すること」と第2因子「適応に関すること」、次に、第3因子「内面に関すること」に関心を向けていると示唆された（表5）。

表1. 自閉症児に対するイメージについての質問項目における平均値と標準偏差

項　目	平均値	標準偏差
1. 優しい―厳しい	4.70	1.076
2. 明るい―暗い	4.28	1.022
3. 静かな―うるさい	3.87	.996
4. 活発な―不活発な	4.18	1.046
5. 頼もしい―頼りない	3.64	.846
6. 愉快な―不愉快な	4.62	.919

7.	たくましい—弱々しい	3.89	.828
8.	落ち着いた—落ち着きのない	3.03	1.073
9.	思いやりのある—わがままな	4.36	1.070
10.	かわいらしい—にくらしい	4.76	.869
11.	元気な—疲れた	4.82	1.002
12.	積極的な—消極的な	4.04	1.021
13.	暖かい—冷たい	4.65	.925
14.	にぎやかな—さびしい	4.56	1.043
15.	陽気な—陰気な	4.42	1.050
16.	強い—弱い	4.02	.896
17.	気持ちのよい—気持ちのわるい	4.30	.755
18.	親切な—不親切な	4.52	.857
19.	安定した—不安定な	3.04	1.097
20.	まじめな—不真面目な	4.60	.950
21.	素直な—強情な	5.12	1.259
22.	自由な—不自由な	5.05	1.179
23.	敏感な—鈍感な	5.50	1.095
24.	社交的な—非社交的な	3.65	1.093
25.	慎重な—軽率な	4.48	1.119
26.	のんびりした—こせこせした	4.48	1.119
27.	親しみやすい—親しみにくい	3.98	.916
28.	面白い—つまらない	4.50	.937
29.	意欲的な—無気力な	4.32	.928
30.	外向的な—内向的な	3.67	1.039
31.	感じのよい—感じのわるい	4.19	.830
32.	充実した—空虚な	4.14	.854
33.	好きな—嫌いな	4.50	.927
34.	きちんとした—だらしのない	4.28	.891
35.	良い—悪い	4.52	.897
36.	幸福な—不幸な	4.48	.846
37.	複雑な—単純な	4.66	1.147
38.	理性的な—感情的な	3.35	1.348
39.	鋭い—鈍い	4.48	1.078
40.	おしゃべりな—無口な	4.35	1.116

表 2. 自閉症児に対するイメージについての質問項目における接した経験有無別の平均値と標準偏差

	経験の有る学生 n=50		経験のない学生 n=63		
項　　目	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	t 値
1. 優しい―厳しい	4.74	1.103	4.67	1.063	.358
2. 明るい―暗い	4.42	1.032	4.17	1.009	1.271
3. 静かな―うるさい	3.84	1.095	3.89	.918	-.258
4. 活発な―不活発な	4.36	1.025	4.03	1.047	1.671
5. 頼もしい―頼りない	3.54	.973	3.71	.728	-1.089
6. 愉快な―不愉快な	4.80	.904	4.48	.913	1.881
7. たくましい―弱々しい	3.82	.941	3.95	.728	.843
8. 落ち着いた―落ち着きのない	3.00	1.030	3.05	1.113	-.233
9. 思いやりのある―わがままな	4.38	1.086	4.35	1.065	.151
10. かわいらしい―にくらしい	4.72	.834	4.79	.901	-.446
11. 元気な―疲れた	5.00	.926	4.68	1.045	1.686
12. 積極的な―消極的な	4.36	1.005	3.79	.970	3.034**
13. 暖かい―冷たい	4.68	.891	4.62	.958	.347
14. にぎやかな―さびしい	4.72	.991	4.43	1.073	1.483
15. 陽気な―陰気な	4.66	1.118	4.22	.958	2.241*
16. 強い―弱い	4.06	.998	3.98	.813	.445
17. 気持ちのよい―気持ちのわるい	4.25	.716	4.35	.786	-.763
18. 親切な―不親切な	4.46	.838	4.57	.875	-.685
19. 安定した―不安定な	3.06	1.252	3.03	.967	.135
20. まじめな―不真面目な	4.48	.931	4.70	.961	-1.216
21. 素直な―強情な	5.34	1.206	4.94	1.281	1.707
22. 自由な―不自由な	5.24	1.205	4.90	1.146	1.510
23. 敏感な―鈍感な	5.48	1.092	5.51	1.105	-.134
24. 社交的な―非社交的な	3.80	1.143	3.52	1.045	1.339
25. 慎重な―軽率な	4.46	.994	4.49	1.216	-.151
26. のんびりした―こせこせした	4.60	1.161	4.38	1.084	1.034
27. 親しみやすい―親しみにくい	4.16	1.076	3.84	.745	1.857
28. 面白い―つまらない	4.56	.907	4.44	.963	.650
29. 意欲的な―無気力な	4.46	1.014	4.21	.845	1.450
30. 外向的な―内向的な	3.86	1.088	3.52	.981	1.724
31. 感じのよい―感じのわるい	4.38	.878	4.03	.761	2.256*
32. 充実した―空虚な	4.20	.948	4.10	.777	.646
33. 好きな―嫌いな	4.52	.863	4.49	.982	.158
34. きちんとした―だらしのない	4.30	.909	4.27	.884	.178

35. 良い―悪い	4.56	.837	4.49	.948	.398
36. 幸福な―不幸な	4.46	.862	4.49	.840	-.199
37. 複雑な―単純な	4.68	1.203	4.65	1.109	.134
38. 理性的な―感情的な	3.20	1.278	3.46	1.401	-1.020
39. 鋭い―鈍い	4.30	.974	4.62	1.142	-1.573
40. おしゃべりな―無口な	4.30	1.282	4.38	.974	-.381

*p<.05　** p<.01

表 3. 自閉症児に対するイメージについての質問項目における因子分析の結果

項　目	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子
第 1 因子「態度に関すること」			
35. 良い―悪い	.887	-.144	-.091
17. 気持ちのよい―気持ちのわるい	.726	-.023	-.144
36. 幸福な―不幸な	.721	-.278	.171
10. かわいらしい―にくらしい	.712	.206	-.241
18. 親切な―不親切な	.703	-.066	.031
33. 好きな―嫌いな	.663	.096	.005
20. まじめな―不真面目な	.601	-.189	.106
34. きちんとした―だらしのない	.479	.018	.193
28. 面白い―つまらない	.473	.339	-.034
32. 充実した―空虚な	.471	.157	.331
31. 感じのよい―感じのわるい	.463	.251	.224
9. 思いやりのある―わがままな	.429	.105	.090
1. 優しい―厳しい	.423	.233	-.048
第 2 因子「適応に関すること」			
14. にぎやかな―さびしい	-.141	.857	-.094
15. 陽気な―陰気な	.071	.805	-.024
4. 活発な―不活発な	-.107	.716	.116
12. 積極的な―消極的な	-.164	.682	.237
2. 明るい―暗い	.034	.620	.184
11. 元気な―疲れた	.235	.519	-.274
13. 暖かい―冷たい	.376	.449	-.166
第 3 因子「内面に関すること」			
30. 外向的な―内向的な	-.059	.176	.733
19. 安定した―不安定な	.183	-.189	.696
24. 社交的な―非社交的な	-.086	.186	.644
38. 理性的な―感情的な	-.089	-.016	.488
5. 頼もしい―頼りない	.177	.078	.452
8. 落ち着いた―落ち着きのない	.100	-.265	.442
16. 強い―弱い	.082	.184	.402

表4. 自閉症児に対するイメージについての各因子における分散分析の結果

区　分	平方和	自由度	平均平方	F値
支　援	68.270	2	34.134	119.723*
被調査者	90.545	112		
誤　差	63.866	224	.285	
全　体	222.681	338		

*$p<.05$

表5. 自閉症児に対するイメージについての多重比較による各因子の平均値の差

	第2因子「適応に関すること」	第3因子「内面に関すること」
第1因子「態度に関すること」	.030	.937*
第2因子「適応に関すること」		.966*

*$p<.05$

Ⅳ 考　察

自閉症児に対するイメージについての平均値が最も低い項目は「落ち着いた―落ち着きのない」で、最も高い項目から、「敏感な―鈍感な」、「素直な―強情な」、「自由な―不自由な」であった。保育を学ぶ学生は、自閉症児の落ち着きのなさや過敏性を問題視している反面、マイペースな行動を自由で素直な印象で好ましく感じていると窺える。したがって、自閉症児が示す独特な状態から、保育を学ぶ学生の8割以上が自閉症児に対して関心を持つのであろう。

自閉症の大多数が聴覚過敏や触覚過敏等の問題を有している。また、自閉症に生じる原因不明のパニックなどの行動障害の原因の一つとして、感覚過敏が関与しているとされている（川崎・三島・田村他 2003）[8)]。感覚過敏については、現在用いられている自閉症の診断基準よりも、本人が現実的に抱く困難性の本質に近く、自閉症の核心部分との関連がより深いとの見方もなされるようになってきた（東條 2002）[9)]。保育士や幼稚園教諭の養成課程における自閉症の障害特性に対する理解を深める教育が、保育を学ぶ学生の抱くイメージに影響を及ぼしていると考えられる。

また、自閉症児に接した経験の有無別に、各質問項目の平均値と標準偏差を算出し、各質問項目でt検定を行った結果、有意差が認められたのは「12．積極的な―消極的」、「15．陽気な―陰気な」、「31．感じのよい―感じのわるい」の3項目（10.0％）であった。3項目の平均値共に、自閉症児に接した経験がある方が高かった。このため、自閉症児に接する経験は、子供としての活発さあるいは子供らしさを感じ取ることにもつながっていると判断される。

カナーは1943年の報告以降、自閉症があると同一性の保持が顕著で、共感性が希薄なため他者とのコミュニケーションに困難さがあると指摘され続けている。認知機能・知的機能の高い高機能自閉症児にあっても、対人関係の問題は中核的症状をなすものと指摘されている（Wing, 1992）[10)]。したがって、第1因子「態度に関すること」は、自閉症児における他者との関わり方やコミュニケーションの特性に対するイメージを表しているものと言える。

自閉症の相談を行う機関では、家族や支援者から、こだわり、パニックなどの行動障害への対応が困難との相談が多い（石井　2006）[11)]。自閉症には、独特な障害特性があり、特に人間関係の障害があることで社会適応に困難さがある。したがって、第2因子「適応に関すること」は、保育を学ぶ学生

が自閉症児の社会適応の困難さに対して抱くイメージを表していると推察される。

自閉症児は、健常児が4歳頃から解決可能になる誤信念課題を通過することが困難である。そのため、自閉症の中核的障害が「心の理論」の欠如にあると指摘されている(Baron-Cohen, Leslie, Frith, 1985)[12)]。自閉症児におけるコミュニケーション障害の背景には、「心の理論」の問題がある。第3因子「内面に関すること」は、自閉症児における自分の言動が相手にどう受け取られるかを想像できない障害特性に対するイメージを表していると言えよう。

2013年のDSM-5において、自閉症スペクトラム障害（ASD）は、「社会的コミュニケーションおよび相互交流の欠陥（persistent deficits in social communication and social interaction across contexts)と「(限定され繰り返される行動、興味、活動)restricted, repetitive patterns of behavior, interests, or activities」とされている。自閉症児を支援する上で、その対人や行動に関する障害特性を把握しておくことが求められる。したがって、保育を学ぶ学生は自閉症児を、「態度に関すること」（第1因子）と「適応に関すること」（第2因子)、次に「内面に関すること」（第3因子）に関する観点からイメージするものと考えられる。

自閉症児に対する運動を中心とする自由遊びの取り組みにおいて、自由遊びは動の幅を広げるだけでなく他者への関心を向ける契機となること、他者が遊んでいる様子を見て貸してほしいと思ったり一緒にやりたいという欲求を生じさせたりすること、および子供同士で思いを伝えることは難しくても学生トレーナーが伝え方を提案したり代弁したりというサポーターの役割を果たしている。このような周囲の関わりが、自閉症児のコミュニケーション行動を促す役割を果たしていると報告されている（中島 2014）[13)]。そのため、学生が自由遊びのなかで自閉症児に接すると、子供らしさを感じることで肯定的に捉えるようになると考えられる。保育士や幼稚園教諭を養成する教育課程において自閉症に関する理解を深める際、その障害特性を知ることは不可欠だが、自閉症児と接する経験により理解を深める教育も重視すべきであろう。

V　結　論

保育を学ぶ学生が抱く自閉症児に対するイメージについて検討した。その結果、①自閉症児の落ち着きのなさや過敏性を問題視しているが、マイペースな行動を自由で素直な印象で好ましく感じている。②自閉症の障害特性に対する理解を深める教育が学生の抱くイメージに影響を及ぼしている。③自閉症児に接する経験は、子供としての活発さあるいは子供らしさを感じ取ることにつながっている。④自閉症児に対して、まず「態度に関すること」と「適応に関すること」、次に「内面に関すること」の観点からイメージをしている。⑤保育士や幼稚園教諭を養成する教育課程において自閉症児と接する経験により理解を深める教育も重視すべきである。以上が考察された。

謝　辞

本調査に協力していただいた皆様に、感謝致します。

引用文献

1)Kanner, L. Autistic disturbances of affective contact. Nervous Child,　2　217-250　1943（牧田清志訳　精神医学　18　897-906　1976）

2)Richman, S. Raising a child with autism : A guide to applied behavior analysis for parents.

Jessica Kingsley Pub 2001
3)田実潔 『購読演習』による自閉症イメージ形成の可能性について―教授法(FD)の観点から― 北星学園大学社会福祉学部北星論集 44 109-118 2007
4)石山貴章・安部孝・田中誠 短期大学生の「自閉症」に関する認識 埼玉純真短期大学研究論文集 1 9-18 2008
5)Osgood, C.E., Suci, G.J., Tannenbaum, P.H. The measurement of meaning. University of Illinois Press, Urbana, 1957
6)岩下豊彦 SD 法によるイメージの測定 川島書店 1983
7)神宮英夫 印象測定の心理学 川島書店 1996
8)川崎葉子・三島卓穂・田村みずほ他 広汎性発達障害における感覚知覚異常 発達障害研究 25(1) 31-38 2003
9)東條吉邦 高機能自閉症・アスペルガー症候群への特別支援教育に関する試論―脳の機能としての接近、回避判断の特異性の視点から教育的支援の在り方を考える―国立特殊教育総合研究所研究紀要 29 167-176 2002
10)石井哲夫 発達障害者支援法の概要と運用の現状更生保護 57(3) 13-18 2006
11)Wing, L. Manifestations of Social Problems in High Functioning Autistic People, Schopler, E. & Mesibov, G. (eds.) High Functioning Individuals with Autism, New York, Plenum Press. 1992
12)Baron-Cohen S, Leslie AM, Frith U, Does the autistic child have a 'theory of mind'?, Cognition, 21(1) 37–46 1985
13)中島範子 知的障害を伴う自閉症児の自由遊びにおける他者との関わり 九州生活福祉支援研究会研究論文集 8(1) 19-25 2014